

安井信朗著「パパは生きている——植物人間
から奇跡的に甦ったある科学者の手記」

横浜市大整形外科 土 屋 弘 吉

一高、東大を卒業した大手電気メーカーの将来を嘱望された中堅幹部が、ある日突然に昏睡状態となり、覚醒したときは四肢は麻痺し、言語は不能となり、わずかに不可解な言葉を発し、時に眼から涙を流すだけのほとんど植物人間に等しい状態で横たわっていた。

この患者が大阪日赤から、新幹線で運ばれて関東労災病院に移され、そこでリハの特訓を受けはじめ、BFOを用い手に鉛筆を結えて字を書こうとするが人の読める字にはならない。そのようなときに大野部長から電動タイプを使ってみてはという助言があって、英文の電動タイプ

を借りて練習をはじめた。そのときに打った最初の文字は「先生、ありがとう」という主治医への感謝の言葉であった。

この手記は、この患者が、只一つの意志の疏通の手段である電動タイプを用いて、一字一字を仮名文字で綴ったものを、一般人が読み易いように仮名まじり文に書き改められたものである。外部からは植物人間としか思われなかった患者が、「発病の原因と倒れた時の真相について」と題する章の中で発病時の模様を詳細に記憶しており、意識不明のようにみえながらまわりで起こったことを詳しく記述しているあたりの描写

は、読者の感動を誘うであろう。

この患者のリハビリテーションに特に預って力があつたのは奥さんの献身的努力である。電動タイプをセットするのにも当然介助は必要であり、入浴の時は一種の懸吊具を作つて風呂場まで軽く運搬出来る工夫をし、そのうえ小学6年と3年の二人の子供を立派に育てあげて長男は父親と同じ大学に合格、長女は都立高に同時に合格し、病に倒れて後7年間の苦闘の甲斐あって、再び一家団欒の時を迎えることができたというあたりの奥さんの手記にも感動を禁じえない。

この書は四肢麻痺とコミュニケーション障害を有する患者の側からみたリハビリテーションの書であり、同時に人間の愛と努力が果たす力の大きさを教えるものである。

(B6判, 236頁, 980円, 風媒社刊)